



宮村美毅

グループホーム向の山
施設長

ほほえみ選手名鑑

宮村さんってどんな人？



スタッフ：鈴木麻友

尊敬できる上司！

介護現場での経験が豊富なので、その知識の深さや技術の高さには驚かされます。介護に対する情熱も人一倍で、この施設内のみならず、ほほえみグループ全体から信頼を集めています。

怒った顔を見たことはありません。

たとえば仕事でミスをした、決して怒った顔はせず、やさしく諭すように話してくれます。そんな人柄を慕うスタッフはとて多いですよ。



スタッフ：前田未散

友だちみたいな人。

私はこの開設時からお世話になっていますので、宮村さんとは友だちみたいな感じ。なんでも相談に乗ってくれるいい方ですよ。

利用者：
大久保さん



いつも全力投球！

誰に対しても誠実。常に全力で目の前の仕事に取り組むので、いつも多忙です。また、自分に厳しいので、ほどほどに仕事に取り組んでくださねって思っています(笑)。

スタッフ：
山口富恵

グループホーム 向の山



庭作りに熱中する利用者様

「生きがい介護」がコンセプトのグループホームです。女性は家事にやりがいを感じる方が多いですが、男性は目標を達成することにやりがいを感じる方が多いです。そこでこの施設では男性向けに作物の栽培や井戸掘りなど、男性の利用者様にやりがいを感じていただける様々な暮らしを提案しています。

〒468-0012 名古屋市天白区向が丘3丁目1710番地
TEL 052-893-6487 <http://hohoemi33.co.jp>

Facebook

フェイスブックで「株式会社ほほえみ」を検索して頂くか、右記のQRコード→を読み取りアクセスしてください。



向の山スタッフや
利用者さんが語る
宮村さんのホント。

宮村 美毅 (みやむら よしき)

三重県出身

特技：速くてキレイなベッドメイク

趣味：洗車・ドライブ

好きな言葉：好きこそものの上手なれ

尊敬する人：社長と部長

今欲しいもの：日産ティアナ

好きな映画：ショーシャンク空に

好きな本：あらしの夜に

好きな場所：向の山、玄関にあるベンチ

ブログやってます！

ブログタイトル：「ミヤの自然体 でGO！」
<http://blog.livedoor.jp/miyamura333/>

プライベートの私

私のプライベートを
ちょっとだけ
ご紹介します。

早朝の洗車が趣味



車が好きなのは多いと思います。私はちょっと変わっているかもしれませんが、車の何が好きかって、洗うことが好きなんです(笑)。ピカピカに磨かれた車を眺めるときの満足感といったらないですね。休みの日、朝の6時から洗車するのが、生きがいの一つなんです。

ドライブの行先はどこでもOK



家族5人でドライブに出かけることも大好きです。子どもたちとテレビを見ながら「次はここに行ってみよう」なんて目的地を決めてから出かけるのですが、正直、行先はどこでもいいんです(笑)。車を運転している時間が好きなので、遠ければ遠いほどいいですね。

祖父母に育てられた少年は 大人になり、介護のプロとなった。

平成22年に開設された「グループホーム向の山」の施設長を務めているのが、宮村美毅です。以前は違う介護施設で働いていましたが、理想の介護を追い求めて辿り着いたのがここほえみでした。「介護職に就くなんて、想像もしなかった」と語る宮村が、なぜ介護の仕事に打ち込むようになったのか。その半生を追います。



原点

宮村は1977年、三重県に生まれました。彼が4歳のとき、両親が離婚。そのため幼稚園児の頃からいわゆるカギ子として暮らします。しかし彼は孤独ではありませんでした。なぜなら母が忙しく働く間、祖父母が面倒を見てくれたからです。「なぜ介護の道に進んだのですか?」と聞くと「おじいちゃん、おばあちゃんが大好きだからですよ」と即答する宮村。祖父母が不在のときにも、近所のお年寄りがかわいがってくれたそうです。

ターニングポイント

ただ「将来、介護の仕事をするなんて想像もしなかった」という高校生の宮村が、介護福祉士を育成する専門学校に進んだのは「人の役に立てる仕事に就きたかったから」だそう。専門学校では同級生や先生に恵まれ「介護のプロとはどうあるべきか?」について熱く議論を重ねるうちに「この仕事は面白い!」と感じるようになりました。また、実習を通じて、お年寄りとの会話が好きな自分を再発見できたことも大きかったそうです。

卒業後は、地元の介護老人保健施設に就職。しかし現実とは厳しく、学生の頃夢見ていた介護の世界とのギャップに悩みます。そんなとき宮村の目の前に現れたのが、ほえみ代表の杉浦でした。杉浦の介護に対する姿勢に共感してほえみに転職。このとき宮村は30歳でした。

ほえみ入社

ほえみに入社後、利用者であるお年寄りがお茶を入れ、洗濯をする姿にショックを受けます。宮村は介護を「させて頂くもの」だと捉えていたため、お茶はスタッフが入れて差し上げるのが当たり前だと思っていました。そんな宮村に杉浦は「お年寄りのできることを奪っていいと思う?」と問うたそうです。グループホームは認知症の方を介護する施設ではない。認知症の方々の共同生活を介護する場所だ。お年寄りの生活が中心にある施設をつくるのが私たちの仕事だよ、と教えられたのです。

また、スタッフの「もっとこうしたら、良い介護ができるのに!」という想いを実現できることも、ほえみで働く大きな魅力だそう。常日頃から「60歳になったらオーブンのスニーカーに乗りたい」と話していた宮村に、杉浦が「それ、介護に結び付けようよ」と持ちかけたことをきっかけに、社用車としてスニーカーを導入。宮村は「利用者の方と1対1で話せる空間をつくりたかったんです。その念願がかなって、とても嬉しかった」と語ります。

現在

そして入社から3年が経った頃、施設長に抜擢。はじめは「自分に出来るかな?」と不安を感じたこともありましたが、周囲のサポートもあり、施設長という肩書も板についてきました。

グループホーム向の山は「生きがい介護」を掲げています。現在、要介護者の約80%を占めるのが女性。そのため、介護サービスも女性中心になっているのが現状です。そこでこの施設では女性のみなならず、男性にも生きがいを感じてもらうために、日常大工や畑仕事など「男がやりがいを感じる仕事」を提供しています。先ほどのスニーカーも、男性の利用者に生きがいを提供することが大きな目的のひとつでした。

「正解がないのがこの仕事の魅力。創意工夫を重ねながら、より良い介護を追求できることが楽しい」と語る宮村。大好きなお年寄りへの想いを胸に、自らが理想とする施設の実現に奮闘する毎日です。

宮村美毅 自筆年表

1981年 両親が離婚。母一人、子一人に。小さな頃には片親だからという理由で同級生にからかわれたことも。しかし母はそれを知った途端、小学校に殴りこみ。大好きな母ですが、ときどきちよつと怖かった(笑)。

1995年 ずっと盲導犬のトレーナーになりたいかった私。しかしその道は険しく、別の道を探し始める。当時、高校の先生に「お前は介護に向いているよ」と言われたことを覚えていたが、なぜ私の天職が介護であることを分かっていたのか今でも不思議。この年、介護福祉士になるため専門学校へ進学。



1998年 就職した介護老人保健施設で、はじめて人の死という現実を直面。「もっとこうしてあげればよかった」という後悔が次々にあふれてきて、辛い思いをする。この経験をきっかけに「お年寄りが笑顔でいられる時間を、もっと多くつくりたい」と強く心に決める。



2000年 職場の同僚だった女性と結婚。これまでに二男一女をもうける。今では子どもたちが寝静まった夜、夫婦で晩酌を交わすことが楽しみの一つ。

2005年 杉浦社長と出会う。やり手の若い社長と聞いていたので、車好きの私は「すごい車に乗っているんだろうな」と勝手に想像したが、小型車(ファンカーゴ)で颯爽と現れ、びっくり(笑)。

2010年 4月、新設される「グループホーム向の山」の施設長を任される。男の生きがい介護の一環として、井戸掘りがスタート。



8月、生きがい介護をさらに充実させるため畑を作る。12月、次なる取り組みとして、キノコの栽培をスタート。これまでにシイタケ、シメジ、マイタケ、ヒラタケ、ナメコなどを収穫。



2011年 この年から、地域の子供たちとの交流に役立と考えカブトムシの飼育をはじめ。